

## 県内最古の土師器

鶴巻前(つるまきまへ)遺跡出土の土師器(どしき)の中で、壺(つぼ)などに装飾(そうしょく)を施(ほどこ)されるものは、県内でこれまで確認されている最も古い時期とされる古墳時代前期の土師器(蔵王町大橋(おおはし)遺跡、仙台市戸の内(とのもうち)遺跡出土)より古いと考えられています。

IV-2-②

## 副葬品

古墳の埋葬部(まいそうぶ)に葬(はさむ)られた人物と一緒におさめられた品物(ひもの)が、副葬品です。鏡(かがみ)・剣(つるぎ)・首飾(くびり)など葬られた支配者にふさわしい貴重品(あじゅうひん)や、様々な農具(のうぐ)や工具(くわい)などもおさめられていることが多いようです。これらは、葬られた人の死後(しのう)の暮らしのことも考えて一緒に埋葬されたのかもしれません。

IV-2-⑤

## バラエティーに富んだ土器の種類

古墳時代の中ごろ以降(いこう)、カマドが普及(ひきゆつ)したことにより、煮炊(にます)き用の胴(づの)の長い甕(おがめ)や甑(こしき)と呼ばれる蒸(むし)し器(き)が使われるようになりました。食器には現在のごはん茶碗(ちゃわん)のような土器(どしき)もあらわれ、一人ひとりが自分の器(うつわ)を使って食事をするようになったようです。

IV-4

## 須恵器

須恵器は5世紀になって、朝鮮(あさひせん)半島から渡来人(ひりじん)によって伝(つた)えられたもので、輪積(わんせき)込みによっておおまかな形を作り、仕上(しあげ)にろくろを用いて成形(せいけい)し、1,000度以上の高温になる窯(窯場)の中で焼き上げられた土器です。

高温で焼かされることで、従来(じょうらい)のものに比べると、青灰色(せいいろいろ)がかっており、はるかに硬(たか)くて丈夫(じょうぶ)なのが特徴(とくちょう)です。また、ろくろを使用することにより、大量に同じ規格(きくわく)でつくることができるようになりました。

この土器は、窯で焼き上げられる焼き物の元祖(げんそ)とも言えるでしょう。

IV-2-③

## 各遺跡の出土遺物紹介

IV-2-⑥

## 埴輪

古墳の墳丘やその周(まわり)に立て並(なら)べた素焼(すやき)の土製品(どせいひん)が、埴輪(はづる)です。埴輪という名称は、8世紀のはじめにまとめられた『日本書紀(にほんしょき)』の中に、古墳上に埴輪を立てたという記事(じし)があることから付けられました。

埴輪は、古墳に並べられ、聖域(せいき)を区画(くわく)したり、埋葬(まいぞう)のセレモニーを行う際に使われたと言われています。埴輪には、まるい筒(つば)の形をした円筒(えんとう)埴輪やラッパ型をした朝顔形(あさがねがた)埴輪、壺形(ひちがた)埴輪、さらには家や鎧(よろい)、人物などをかたどった形象(けいじょう)埴輪があります。

これらからは、当時の社会状況(じゅかいじょうきょう)や生活の様子をうかがい知ることができます。

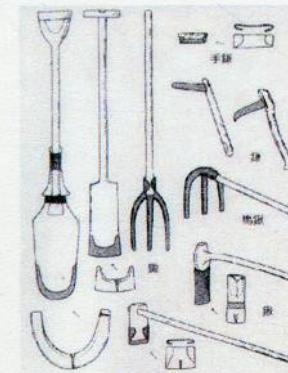
IV-2-④

## 鉄の刃をもつ農具

道具をつくるための刃物(はのもの)だけでなく、土を掘(ぬ)るための鋤(とつ)・鍬(くわ)の刃(は)として、鉄の果(は)たした役割は大きかったに違(へ)いません。

魔法(まほう)の道具～鉄へしかし裏(うら)を返(かえ)せば「鉄が人を使役(つかはせら)する時代」が到来(とうらい)したとも言えるのでしょうか。

IV-3



鉄の刃をもつ農具いろいろ  
(江幡洋治「古墳の土器」)上の私稿

IV-3